



話ができると楽しいな。  
英語をおぼえて

わたしたちも、  
みんなと話ができるといいな。

早く日本語をおぼえて、

クラスの大の人気者だ。

ポール君は、  
ポール君のところへ行く。

放課になると、  
みんなたかるように

みんなと勉強ができるもの。

だって、ことばがわからなくても、

なんの教科が好きかな。

まだ日本語がわからない。

先生もたいへんだ。

名前が、ポール・クラムライン。

青い目の友達が来た。

わたしたちのクラスに、

昭和55年11月1日  
編集／発行  
岡崎市教育委員会

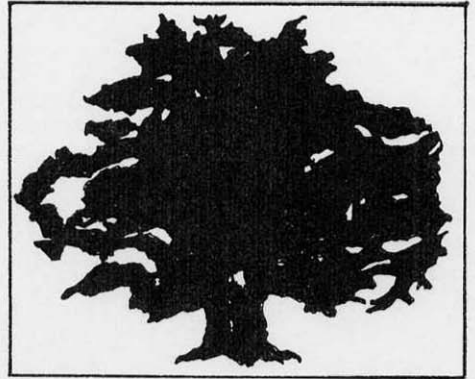


(ポール君転入—三島小)

## — 教育随想 —

## 師道

美濃部 栄



求道者に通ずるものがある。』と述べておられる。

師道は師である者のとるべき道であるが、当然弟子が考えられ、師と弟の直接的な結合が根本になる構造で、人と人との教育的交渉を内に含むものである。教育は先覚者が後進者を導く。後進者は先覚者の人格を敬慕し、之に影響を受けることになる。学校教育においても、教師は愛を以て与え、児童・生徒は敬を以て受けとるといふ心の通いがあればこそ教育である。

さて、教育者の道について、本学の伊藤藤校長は、「教員と教育家」という小論文の中で、「学者は必ずしも教育者でないと言われるように、知識だけでは教授者になれども教育家にはなれない。人間として生きていくことの本来の姿を学びとらせようと努めるところに教育家の本質がある。教育家は単なる求知者でなく、

に強い意志や実行力を身につけて、人生の生き方を自覚させることが大切である。その意味において、教師の修養による自己充実が重要となる。

わたくしも、小学校を振り出しに大学まで、各種の学校に五十年近く教師を勤めてきた。その間において、教育者として一番印象に残っている先生を紹介する。昭和十四年三月から五年間、新設の東京府立十二中（現在の都立千歳高校）に勤めた。初代の木村伝吉校長は、当時三十八歳で、教師はそれ以下の若い年齢構成であった。

戦時下ということもあり、「学ヲ修ムルハ誠之ニアリ」、「国家有為ノ材トナルレ」などの内容を含めた「教育綱領」と、靈峰富士をかたどる「校章の辞」を信条として、校長始め全教員が師弟同行の教育を行った。

校長は安易な妥協を許さぬ厳しさと、温情溢るる人間味があった。おそらく十二中を一生の教育の場としてみえられたのだから、終戦後自分の意志で退職された。先生の胸中さぞかしと察せられるが、そこに先生の偉大さを見出すことができる。

先生は、五十三年三月二日七十六歳で逝去された。わたくしも告別式に参列し、ご靈前で、先生のご薫陶により今日あるを得たご高恩に感謝し謹んでご冥福をお祈りした。

（岡崎女子短大教授）

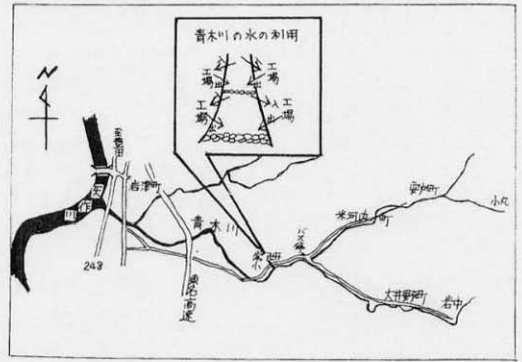
## 命金の相場は40ドル

太田 清美



教育事情視察ということで、ニューヨークを始めアメリカの主要九都市を一巡させてもらった。広大な大陸を縦横に飛んで、さすがは世界一の国だなと思った。だが、治安では日本程行き届いた国はないようだ。アメリカでも特にニューヨーク、ロスアンゼルス、サンフランシスコでは、街角でピストルを突きつけられることなど日常茶飯事のようにだ。

滞在中、日本の夫婦連れ二組が夜の街で襲われ、一人が腹部に、一人が股を貫通された事件、大使館勤務の夫を持つ夫人が狂問何者かに連れ去られ、三日経って麻薬でふらふらになって発見された話。東芝の専務が身ぐるみ剥ぎ取られた話を聞かされた。だから命金といって40ドルを常時胸ポケットに用意していて、襲われたら問答無用、即座に渡すことだといわれた。この金は麻薬常習者が麻薬注射をうつためだという。これが多くても詐欺罪になるといって怒りを買おうようだ。観光客は狙われるのでニューヨークの夜は石川昌宏先生（日本人学校）に古



— ふるさとの山河 —

# 青木川

国道二四八号線を北進すると、岩津町に入る手前で川を渡る。この川が「青木川」である。平野部の青木川は、河床が砂で、ゆるやかな流れである。

ところが、そこから上流へ約二キロメートル、滝山寺仁王門の辺りまで行くと、もう河床は岩石に変わり、急勾配になる。兩岸は、そのまま山へとつながり、谷は狭くなっていく。さらに上流に進むと、大井野口（名鉄バス）のバス停がある辺りで二つに分かれる。一方は大井野町を経て岩中町へ、もう一方は米河内町を経て安戸町へと続き、樹枝状の流域形態をとる。

この流域形態の中で、安戸町で小丸川と合流する起点から矢作川に合流するまでの九一四〇メートルを青木川という。

（矢作川との合流点から安戸町の常磐橋までが一級河川で、それからは普通河川である）

昔から、河川は人々にとっては、交通、灌漑など生活に欠くことのできない自然の恩恵であると言われるが、谷間を流れる青木川は、あまり利用されなかった。

青木川が人々から脚光を浴びたのは、河川が水力発電や工業用水として重要な存在となった明治以後であった。

明治十年、臥雲辰致が発明した足踏式紡績機をヒントに、常磐村の野村茂平次（流山寺の寺侍の出）が、今まであった米つき用の水車の一つを紡績用の動力として利用し、機械化した。青木川流域の水車紡の始まりである。明治十三年の常磐村には水車場十七、ガラ紡工場が二

十五あった。そして大正期までに、常磐村のガラ紡経営者は十七名も増加した。しかし、電力の普及に従って、回転にむらのある水車は一定の回転数にするまでの操作が多いという理由で減り、それに伴い青木川流域のガラ紡は衰退していった。

現在は河岸工事が進み、水車への取水口も排水口も消えつつあるが、水を塞ぎ止めた石橋を捜すと、その付近にはまだ取水口や排水口、水車まで水を運んだ溝を支えた跡が残っている。

常磐小学校の児童は、この青木川に鯉や金魚を放流したり、水遊びをしたりして親しんでいる。

（常磐小 小栗正貴）



ジャンパーを借りて二人で探訪。おかげで40ドルだけ残して帰ることができた。

（山中小）

## 「ゴマルク」

大河内 栄子

念願だった海外旅行のスタートは、共産国の東ドイツからでした。出発前に「へたなことをすると抑留生活だ」などと驚かされ、ビクビクしながら東ベルリン入りしました。そこは、近代的なビルと戦争の傷跡を今だに残す古い建物とが、うまく調和した落ち着いた街でした。そんな雰囲気の中でホッと胸をなでおろしたのは、私だけではなかったはずでした。

待ちに待った自由時間。友と二人でアランデンブルグ凱旋門を目指し出発しました。菩提樹で有名なウンター・デン・リンデンに出て、街角の本屋さんで絵本を買いました。お金を払うと二人の店員さんが難しい顔をして計算をしてくれましたが、私にだけ三十ペニヒのおつりが返ってきません。あわてて「I pay 5 Mark」と叫びました。しかし、むこうは払ったと言っているようです。あきらめて店を出ました。すると友が、今私が五本指を広げて「ゴマルク」と叫んだと言っているのです。私は、「フ・アイ・マルク」と言ったつもりなのですが、どうも違うようです。人類みな兄弟とも言います。身ぶりで通じたようです。

（城南小）



姉妹都市ウデバラの児童・生徒との理解を深め、友情のきずなを強める「中学生の姉妹都市親善訪問」が実現した。  
岡崎市中学生代表、長坂省君（城北中）と安藤美智恵さん（東海中）の二名は藤

田吉信先生（矢作中）とともに、九月五日、東京を出発、コペンハーゲン、ストックホルム、ウデバラ、オスロの四都市を訪問、中学生の眼で率直に見、意見を交換し合い、国際的な視野を広げた。

# ウデバラ

## 中学生の親善使節



3



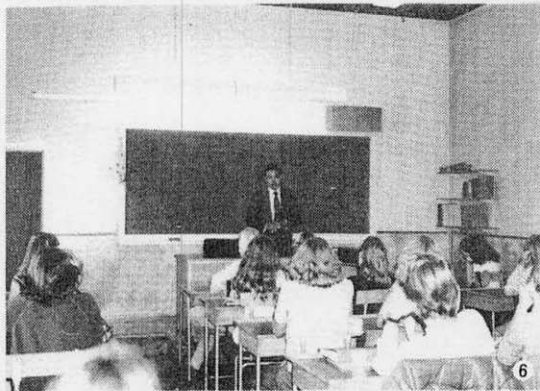
1



2

- ① ウデバラ市役所とマーケット広場。
- ② ウデバラ市街の古い街なみ。
- ③ 渡辺さん宅でのホームステイ。レンとユミと一緒に楽しいひととき。
- ④ マグネベルグ高校でおみやげを贈る。
- ⑤ ウデバラ市郊外の古い農家。
- ⑥ マグネベルグ高校で日本を紹介する藤田先生。
- ⑦ マグネベルグ高校でスライドを使って岡崎の学校生活を紹介。
- ⑧ マグネベルグ高校で英語の授業を一緒にうける。
- ⑨ 市役所前のマーケット広場。





6



7



8



9



4



5

●黒海上空の機内で思い出す森と湖の風景。スエーデンは再び速くなりつつある。前市議長レナート氏と夜のふけるまで語った生活の内輪話、若者たちの間に広がる麻薬、豊かな福祉生活の裏に隠れた税金の高負担等々。

●同年代の考えを不自由な英語を操りながら語り合う二人の中学生の姿同様に、緊張と感動の日々であった。

(矢作中 藤田 吉信)

●デニスはいつも笑っていた。デニスはいつも教えてくれた。彼はまだ九才。僕は英語がほとんど話せないし、彼もまた、少ししかできない。でも、彼は、僕がわかるまで、ゆっくりと説明してくれた。

そして、時間の過ぎるのを忘れて、一緒に遊んだ。自分の大切にしている漫画雑誌も僕にくれた。金色の髪、青い目の男の子。いつまでも忘れないだろう。

(城北中 長坂 省)

●ウデバラでの三日間、私は英語の先生のお宅へ泊めていただきました。一番深く心に残っているのは、親子関係についてです。このお宅のご主人は人前でも、子どもをきつく叱られます。叱られた子どもは、父親をさげす、その後すぐでもまっかな目をして父親に甘えに行くのです。そんな強い愛のつながりに、たいへん心をうたれました。

(東海中 安藤美智恵)

# 教育日々



## バレーボールの魅力

藤川小 冷泉俊明

五年生になったとき、新しくバレー部ができた。ぼくはさっそく入部した。担任の冷泉先生が教えてくださるのでうれしかった。だけど部活動の時の先生は勉強の時のおもしろい先生とはちがって、ものすごくきびしかった。練習がつらい」と先生に言ったら叱られた。

六年生になって選手になれた。たくさんの試合に出れてうれしかった。全日本少年少女バレーボール大会では決勝戦まで進出できた。「フアイト、いくぞ。」

「オー。」と素晴らしい仲間の声がかかった。自分でも気がつかないうちにボールを取って、取って、取りまくっていた。ほとくのプロックが決まればみんながかけよってあく手をしてくれる。うれしい。これがチームワークなんだろうな。やめなくて良かった。バレーを……部報より

この記録を読んだとき、自分は「ホツ」とした。育てたかった協力を子供なりに理解していてくれたからだ。

子供達はスポーツが大好きである。みんな、選手になれて試合にも勝てる」と思っている。その夢をなんとか実現させたい気持ちで全力で指導した。

魅力ある活動にするために「チームづくり」を柱として、技能の劣る子を全員でカバーし、チーム全体のレベルを高めようとする意識や連帯感を大切にしたい。

練習も毎日同じ様な内容を継続するのではなく、ゲームを中心に展開していく。その中で個々の技能がすぐれていても、チームとしてのまとまりがないかぎり勝てないということを会得



してくれた。

力を余さず練習する子供達の技術の進歩はめざましい。このころでは、子供達も自分もボールを追うことが生活の一部となってきた。

## ドングリとO君

常磐小 近藤克子

「おはようございます。」

と、いつもながら元気いっぱいO君から手渡されたものはドングリごまであった。O君の手のぬくもりで何とはなしに温かい。「先生にはいちばんよく回るのをあげたんだよ」と得意そう。

近くで私の服を引っ張る子が

いる。Mさんだ。Mさんは毎朝のように一個のシラガシの実を持ってきてくれる。

「先生、こんなになってるよ。」ふしぎそうな顔をして、そっと手のひらを広げて見せてくれる。「それは芽だよ。ねえ、先生。」すかさず口をはさんだのは、学級でも物知りのK君。

わたしの回りはチビツ子でふくれた。

「先生、アサガオみたいなのに、土にまくと芽が出るかねえ。」

「さあ、どうでしょうねえ。まいてみだい子はいますか。」

「はい。」と、威勢のいい声と共にたくさんの手があがった。

「きょうは、みんなでドングリを拾いにいきましよう。」

いつも子供達の学習の場となっている裏山へ、絵の具の筆洗いに使うポリバケツをぶらさげて出かけた。

常磐の山は、ドングリの実を付ける木々が満ちている。

「この大きなドングリは、こっちの木から落ちたのだよ。」

立派なドングリを見つuckerコツを知っているO君は、ドングリ探しのもつばらのリーダーだ。

「ほれ、落ち葉の下にあったのは、こんなになってるよ。」

かなり大きな芽を伸ばしているドングリを見つけて意気揚々なO君。

子供達それぞれがポリバケツいっぱい取穫物を手にして教室へ帰った。教室の中は、一個二個、三個と、拾ってきたドングリを数える声で、またまたにぎやか。

ドングリごま作りのリーダーもやっぱりO君。ドングリの底部をコンクリートでこすって、マッチ棒を差す手つきもあざやかだ。

教室のあちこちで、ドングリのやしろべえも生まれて子供達の遊びには限りがない。ドングリをいじるO君の目は生き生きして実にさわやかだ。





ホナガイヌビエ

学校放送教育賞で

三島小が文部大臣賞受賞

第十七回学校放送教育賞第二部門（共同研究賞）で、岡崎市立三島小学校は、みこと文部大臣賞の栄に輝いた。

同校では、長年放送をとり入れた学習に取り組んでおり、その成果は各方面より注目されている。

今回は「放送による主体的な学習の在り方を求めて——親子で学ぶ放送教育九か年の歩み——」と題してまとめ、応募の結果日本一となった。

なお、晴れの受賞は去る十月

〔寄贈刊行物・資料等〕  
 ◆矢作川流域一万年の歴史と文化を探る（矢作川流域シリーズNo.1）矢作川流域開発研究会、B5版  
 ◆山中小学校百年史B4版変形  
 ◆映像——この豊かな経歴——美川中学校編、B5版変形

九日、札幌市で開催された「放送教育研究会全国大会」の席上で行われた。

NHK全国音楽コンクール

県大会に優秀校二校

去る九月十四、十五日、岡崎市勤労会館において、NHK全国音楽コンクール西三河予選が行われ、次の各校が入賞した。

●西三子選  
 小学校最優秀賞 六北小学校

●県大会  
 優秀賞 三島小学校  
 優良賞 附属中学校

文化講演会

市民大学特別講座として、次のように文化講演会を開催

- 一、期日 昭和五十五年十一月十五日午後二時
- 一、場所 岡崎信用金庫本店
- 一、講師 前京都芸術大学長 梅原猛氏

第7回 岡崎市中学校新人体育大会

〈水泳競技の部〉昭和55. 9. 14

●総合成績

	優勝	2位	3位	4位	5位	6位
男子	矢作 55	竜海 34	甲山 31	葵 20	福岡 19	南 7
女子	矢作 82	甲山 32	竜海 20	葵 18	福岡 8	六ツ美 7

●個人成績

種目	男子			女子		
	氏名	校名	記録	氏名	校名	記録
100M自	窪田 俊午	竜海	1'03"2	平岩 香里	矢作	1'13"0
400M自	高橋 照安	葵	5'01"0	紺野 恵子	竜海	5'12"2
100M平	望月 裕一	竜海	1'18"2	岡根 久子	矢作	1'22"5
100M背	遠山 健志	竜海	1'14"4	岩月留美子	矢作	1'18"8
100Mバタフライ	畔柳 圭司	甲山	1'07"1	稲垣 春美	矢作	1'19"5
200M個人メドレー	甲村 達也	附属	2'40"9	大島 洋恵	矢作	2'52"7
400M個人メドレー	遠山 浅井・望月 窪田	竜海	4'52"2	岩月・大島 稲垣・矢野	矢作	5'24"0
800Mリレー	伊藤 池野・榮山 鈴木	矢作	9'47"8			
400Mリレー				平岩・大内 矢野・大島	矢作	4'55"5

●印は大会新記録

小学校最優秀賞 三島小学校

優良賞 広幡小学校

優良賞 羽根小学校

中学校最優秀賞 矢作中学校

優良賞 葵 中学校

優良賞 岩津中学校

優良賞 附属中学校

●県大会  
 優秀賞 三島小学校  
 優良賞 附属中学校

●学校環境緑化コンクール  
 矢作、中学校

昭和五十五年度県学校環境緑化コンクールは、審査の結果、岡崎市からは次の三校が入賞し

准岡崎一 美合小、野田雅博／岡崎小、杉浦徳彦／六名小、加藤美穂／三島小、金田聡美／甲山中、長島寛／美川中、山本秀典／福岡中、岩瀬明美／矢作中

た。

県知事賞入選 根石小学校

県教育委員会賞 生平小学校

■健康優良生徒（九月十一日）  
 岡崎一 羽根小 近藤要生 美川中学校

井田小 鈴木理奈

竜海中 竹川恭紹

六ツ美中 村越香代

準岡崎一 美合小、野田雅博／岡崎小、杉浦徳彦／六名小、加藤美穂／三島小、金田聡美／甲山中、長島寛／美川中、山本秀典／福岡中、岩瀬明美／矢作中

●十一月の研究発表校  
 ・男川小11/7（金）「豊かな人間性を育てる書写指導——基礎・基本を大切にして——」  
 ・竜海中11/11（火）「豊かな情操の育成——視覚障害児ととも——」  
 ・連尺小11/21（金）「生活力を高める総合学習」

●岡崎市教育研究論文募集  
 〆切 昭和五十五年十二月一日  
 字数 一二、〇〇〇字以内（四  
 百字詰原稿用紙三〇枚以内）

（7）

# 大給恒と墓地



点

所在地—岡崎市奥殿町

大給恒(松平乗談・一八三九—一九一〇)は、奥殿藩最後(十一代)の藩主である。

恒は、幕末・明治の激動期に重要な役割を果たした。幕政においては、若年寄、陸軍総裁(老中格)をつとめた。維新後は、佐野常民(佐賀藩士)とともに博愛社(後の日本赤十字社)の創設にあたり、組織化のない手となった。さらに、賞典局長・元老院議員・枢密顧問官などを歴任し、日本の近代化に尽くした。

こうした生涯を見る時、そ

に恒の時代感覚の先見性を感じざるを得ない。また、このことが博愛社創設の精神に反映していると考えられる。

奥殿藩は、恒の信州への国替えによって、明治を待たずに幕を閉じるが、今なお郷土の偉人として誇りにしている人が多い。

恒は、明治四十三年、七十一才の生涯を終える。現在、恒をしのぶことのできるものは、八代藩主松平乗尹の墓地(写真)・奥殿藩陣屋跡などがある。

恒の墓地は、東京麻布の香林院にある。

●カット

岩津中

中 島

純

一

## 日本の本を

- 子育ての中の基礎体づくりII 文部省 第一法規 ￥ 380
- 異邦人のいる風景 鷺津美栄子 PHP ￥ 880
- 日本の地蔵 富士 正晴 毎日新聞社 ￥ 900
- 風景を読む 稲森 潤 講談社 ￥ 520
- 男が40代にやって おくべきこと 大和出版 鈴木 健二 ￥ 980
- 家庭教育処方箋 外山滋比古 講談社 ￥ 790
- 抄本おむすびの味 岡部伊都子 創元社 ￥ 1500
- 男の存在証明 浜野 安宏 PHP ￥ 980
- 鑑 真 五月書房 ￥ 1600
- 道の文化 山田 宗睦 講談社 ￥ 1400

へ 小寒 山から小僧が泣いて来た

なんと泣いて泣いて来た……

わらべ歌は子どもの遊びの中で、自然と歌いつがれてきた。「手まり歌」「羽子つき歌」「鬼遊び歌」「お手玉の歌」「縄とびの歌」など、郷愁をさそう懐かしい響きをもっている。伝承わらべ歌として愛唱していきたい。

「しらたき」は冬の鍋物には欠かせない。見た目にはたよりなげで、味もそっけもないのに、肉や魚の味によくなじんで美味である。

四月以来七か月、一年生もすっかり小学生らしくなってきたが、さて、どのような味加減になったことか、あと一味を効かせて、腕をふるいたいもの。

## シオスア

「アー、腹が減った。今日は先生におかずを二はい盛ってくれ」  
食べ盛りの子供達は、自分たちの分け前を取られては大変と、教室の中は一瞬騒然となった。  
「天高く……」か。晩秋のこのごろ、下っ腹が出っ張ってきた様に思えるのは食べたせいだ。トシのせいだ。

澄んだ朝の空気を押しつけるように、生徒たちの合唱の声が周辺の山に響きわたる。

「低音パート、もっとガンバレヨ！ハモってないぞ！」指揮者のKの声が一段と鋭い。日頃、まとまりにかける学級も、文化祭が近づくにつれてひきしまる。窓辺の菊の蕾もふくらみを増してきた。